

第7回 だから、今日、御声を聴いたならば

第3章7節から19節 神の民の安息

- 7 だから、聖霊がこう言われるとおりです。
「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、
- 8 荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、
心をかたくなにしてはならない。
- 9-10 荒れ野であなたたちの先祖は わたしを試み、^{ため} 駭し、
四十年の間わたしの業を見た。
だから、わたしは、その時代の者たちに対して 憤ってこう言った。
『彼らはいつも心が迷っており、わたしの道を認めなかった。』
- 11 そのため、わたしは怒って誓った。
『彼らを決してわたしの安息に あずからせはしない』と。」
- 12 兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、
生ける神から離れてしまう者がないように注意しなさい。
- 13 あなたがたのうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、
「今日」という日のうちに、日々励まし合いなさい。
- 14 —私たちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、
キリストに連なる者となるのです。—
- 15 それについては、次のように言われています。
「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、
心をかたくなにしてはならない。」
- 16 いっただれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか。
モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか。
- 17 いっただれに対して、神は四十年間憤られたのか。
罪を犯して、死骸を荒れ野にさらした者に対してではなかったか。
- 18 いっただれに対して、御自分の安息にあずからせはしないと、誓われたのか。
従わなかった者に対してではなかったか。
- 19 このようにして、彼らが安息にあずかることができなかったのは、
不信仰のせいであつたことが私たちに分かるのです。

それでは今回は、前回に引き続いて、3：7から新しい段落へ移って行こうと思います。
ヘブライ人への手紙の大きな組み立てから言って、1：1～4：13は「神の御言に聴き従おう」ということが中心テーマとして書かれています。その中で3：7～4：11は「神の民の安息」と見出しにあるように、今まで学んで来たプロローグ部分のまとめとなります。

中でも3：7～11は、以下の詩編95編 7節後半～11節からの引証です。

「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように心を頑にしておはならない。あの時、あなたたちの先祖はわたしを試した。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。四十年の間、わたしはその世代をいとい、心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。わたしは怒り、彼らをわたしの憩いの地入れないと誓った。」

そして、続く3：12～19では、その詩編の引証部分の注解がなされています。

また、その先4：1～11では、その詩篇95編の御言の適用が述べられています。更に、最後の4：12～13では、神の御言の力が強調されて、この部分が閉じられています。

そういう大きな区分の流れを、予め聖書の中から読み取って頂いて、今回の3：7～19の言葉を、ご一緒に丁寧に味わって見たいと思います。

第7節～8節

だから、聖霊がこう言われるとおります。「今日、あなたちが神の声を聞くなら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにしておはならない。

冒頭に「だから、聖霊がこう言われるとおります。」と書かれています。この「だから：ディオ」が、どこに掛かっているのかについては、古今多くの聖書学者による諸論（主に、6節に掛かるという説と、12節に掛かるという説）があります。このディオは、神に由来するという意味を擁しており、一般的な接続詞の「だから」ではありません。ですから私は、前回6節後尾の「私たちこそ神の家なのです。」に「だから」が掛かるという論を支持します。私たち自身が神の家なるゆえに、「今日、あなたがたは神の御声を聞くなら、心をかたくなにしておはならない」と、聖霊が私たちに告げられていると受けとめるならば、この「だから：ディオ」は、自然な形で筋が通る、相応しい読み取りを導いてゆくことになると思うからです。

このように、「だから；ディオ」という神に由来する接続詞は、すごく興味深いのです。この繋ぎを用いて、ここから聖書の御言を展開し、講解してゆき、解き明かしていく、そういう姿勢が、この「だから；ディオ」という単語の中に見えて来るのです。例えば「だから、聖霊がこう言われている通りです。」と、幾つかの箇所において「だから」をつけながら語っていく。そのようなことをこの著者は、試みているわけです。

今回の3：7～4：13には、大事な言葉が三つあると思われます。

その一つが「今日」という言葉で、もう一つは「安息」という言葉です。更にもう一つ言葉がありますが、それはその言葉が出て来たところで取り上げたいと思います。

<「今日」の意味について>

先ず私たちは、「今日」という言葉の意味をしっかりと捉えなければなりません。「今日、御声を聞いたならば…」という言い方で語り始めている箇所が、4：13までの間に何度も出て来ますので。

始めに3：7では「『今日』、あなたたちが神の声を聞くなれば」という形で書き始めています。次いで3：13には「『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい」という形で出て来ますし、更に15節では「『今日』、あなたたちが神の声を聞くな…」という言葉がもう一度引証されています。そして、4：7にもう一度「『今日』、あなたたちが神の声を聞くな、心をかたくなにしてはならない」とあり、同じ言葉が、三度も繰り返されていることになるのです。

最初の3：7で取り上げられているのは、正に詩篇が最初に書かれたのと同じ状況（信仰がぐらついていた状況）で、「荒野で試練を受けた頃…云々」とありますから、モーセが出エジプトを敢行した「荒野の時代」であったからこそ、イスラエルに対して神が語りかけられたことを、「今日」という言葉を用いて強調し述べているわけです。

その次の『今日』が記されている4：7以降の部分でも、「ダビデを通して語られたのです」と告げて、「イスラエルの王ダビデの時代」に、神は同じことをもう一度仰ったということを強調しています。

こうしてみると、「今日」という言葉は、3：14では「あなたがたが最初の確信をもって…」という時点で使われ、次は「ヘブライ人の手紙が書かれたその時代」の人々に向かってという時点で、著者は引用しているのですから、ここで使われている3つの「今日」という言葉は、「同じ一つの時点を表しているのではない」ということがお分かり頂けるでしょう。

では、一体ここで使われている「今日」とは、具体的に何を表しているのか、ということ、を、少し考えて見たいと思います。

少なくとも「今日」という言い方で、神と私たちとの関係を取り上げようとする時に、先ず著者の心中にあるのは、「この事柄は切迫している緊急な問題なのだ」ということを訴えたいという思いです。即ち「神があなたがたに働きかけて出会ってくださるその出来事は、繰り返しがきくことではない。一回限りのチャンス到来で、今ここで起こっていることは、真剣な神とのお出会いなのだ」という意味を込めて、「今日」という言葉を使っているのです。

（この頃のユダヤ人キリスト者の信仰の危機、ユダヤ教への回帰や偶然崇拝へ向かいつつある迷いの状況の中に生じた、「今日」という、神との特別なお出合いのチャンス！）

それは、かつての時代とか、誰々の時である「今日」、というような「日付的な意味」ではなく、特別な事柄を表し、「神とのお出会い」そのものを「今日」という言葉で表現しているのです。

そうした意味では、ここでいう「今日」という言葉は、「限りなく終末的な捉え方」ができるのです。終末においてこそ、決着がつけられる『その時』なのだ、という意味さえ持っているのです。それゆえ『今日』は、神と出会う千載一遇のチャンスであり、神の御声をまだ何とか聞くことができる『最後の時』であり、私たちにとっては究極的な決断が迫られる時であるわけです。つまり『その時』の扱い方によって、私自身が『その後』どのように神と関っていくかが問われる大事な問題なのだ、という特別な位置づけをなして、ここでは『今日』という言葉を用いているのです。

私たちは往々にして「時」というものを、何となく川の水のように流れ去っていくもの、次から次に訪れ来たるもの、という捉え方をしてしまうことが多いですが、特に、この手紙が書かれた時代は、ある意味「グレコ・ローマン的な思想」が流布しており、地の表に「人本位、人間中心的世界」を成立させようとしている最中にありました。そこで、もう一度聖書に立ち返るために、結局何が大切かと言えば、「私たちの人生は、流れ去って行くものではなく、良かれ悪しかれ、神の御前に覚えられているものなのだ。私たちの『今日』は、やがて明日になり、過去になってしまう流れの経過を指しているのではなく、『今日』という日を、私が確かに生きた生き様として神に覚えられ、未来に結びついていく日である。だから、終わりの日に向けて位置づけられていく『今日』なのだ、という捉え方をしていくこと」が大切なのだ。それが、「今日」という表現を有するために、この詩篇を取り上げた大きな理由であつたろうと思います。

そして、著者がここで一番問題にしようとしているのは、
「今、あなたは、神と生きた関わりをもっていますか？」
「今、あなたは、神の御声を聞いていますか？」
「今、あなたは、神の御声に対して、忠実に従っていますか？」
という問いかけの中で、「今日」ということを取り上げることです。

明日じゃない、昨日じゃない、まさに『今日』、あなたが生きているその現実の只中で、これらのことはどうなのか？ という問いかけが、神から為されているのです。そういう神の御前における「今」、それが、ここで問われている『今日』という言葉の真意なのです。

7節の後半「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにしてはならない」の引証と言われる詩編95篇を開いて見ますと、その箇所は「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように心をかたくなにしてはならない」となっています。

この違いは、手紙の著者が、ギリシャ語の七十人訳聖書を採用したためであると思われる。詩編では「荒れ野」をメリバやマサに特定しています。これらの地名は、実は神を怒らせたり、試みに出会ったりした『場所』を意味するとも言われています。

出エジプト記17：1～7も「岩からほとばしる水」ということで同じようなことが書かれており、その場所を「マサとメリバ」と名づけ「試しと争い」と名づけたと書いてあります。この詩編はそういう出エジプト記の出来事を背景にして書かれたもので、それを「ヘブライ人への手紙」の中で引証した意味は、正に「出エジプトの荒野における出来事を、もう一度思い起こしなさい」と訴えているわけです。

（注：これがモーセの罪と言われます。主語は神でなくモーセで、それ故に、彼はカナンへ入れませんでした。こうした言葉に神様は厳格です。12節；主はモーセとアロンに向かって言われた。「あなたたちはわたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なることを示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない。」 13節：これがメリバ

(争い)の水であって、イスラエルの人々が主と争った所で、主が御自分の聖なることを示された所である。)

＜「思い起こす」とは＞

歴史は、ある意味では「かつての自分たちを思い起こすこと」ですが、「思い起こす」とは「忘れてはならない」という言葉に言い換えることもできます。

余談になりますが、私は1989年5月23日ヴァイツェッカーが2期目の大統領として再選された日、この日に行った有名な「**荒野の四十年**」(1985年刊行)を引用した演説で「ユダヤ人虐殺の事実を忘れてはならない」と語った言葉が印象的に残っています。

「忘れてはならない」ということは、想起するだけではなく「**私たちの命の生き様の糧に**しなさい」という意味があるそうです。ですから彼は、あの「荒野の四十年」という有名な演説をしました。戦後四十年目にそれを語って「四十年間は、神から与えられた試練の時であって、私たちは、その試練の中で、本当に神と出会って来たのだろうか、ということを実際に問いかけた。・・・そして結論として、そのように神は私たちを愛し、追いつめてくださっているのだから、その御愛に応えていこうではないか。」というのが彼の語ったメッセージの内容だったのです。

その「**忘れてはいけない**」「**思い起こしなさい**」「**記憶し続けなさい**」というヴァイツェッカーの呼びかけは、裏返して言えば「あなたがたは、そのことに立って『今』を生きていますか？ あなたがたの『今』は、その上に成り立っている『今』なのだ、ということをつつでも覚えておきなさい。いつでもそれを明確にしなさい。例えば、太平洋戦争の問題、あるいは世界大戦の問題であれば、そのことに対する懺悔と、そのことに対する償いのために今日を生きる生き方をしてゆきなさい。」ということがドイツの国民に向けて語られていました。

日本でも確かに、今(1996年)から51年前に「私たちは悪うございました」と謝って戦争を止めました、敗戦したのです、国が破れたのです。その時には「二度とこんな戦争をするような国にならない」と皆が決意したわけです。そして、そういう決意の上に立って「私たちは兵力を持たない、武力を持たない国になるのだ」ということを言って、「世界のすべての国々が私たちに対して戦いを挑んだとしても、私たちはそれに対して戦いません」という決意をしたのです。

でも、「今日」になってみれば「そんな決意をしたのかな」というような状況が私たちの国の中ではどんどん拡張されて来ている。そして「私たちは多くの人々に耐えがたい苦痛を与えて来ました」というきちんとした懺悔も保証もないまま、51年間歩み続けて来ました。今では「かつてはそんなこともありましたね」という「覚え」だけなのです。

(2025年の時点でもこの姿勢は変わらない)

「戦争の日を覚えなさい」という「覚えなさい」が、「あの悔しさを、とか、あの惨めさを」という彼らへの同情ではなかったように、テキストでは正に「あなたがたが四十年間、なぜ荒野でさまよい続けたのか、考えてみなさい。それはひとえにあなたがたの不信仰のゆえだったではありませんか。しかも、それは、あなたがただけの問題ではなく、あ

なたがたを指導してきたモーセの不信仰にも関わることはありませんか。」と、ここではすごく厳しい裁きの言葉を、ある意味で、著者がヘブライ人に向かって投げかけているのです。

＜心をかたくなにする＞

「心をかたくなにする」とはそういう意味で「神に対して不従順になる、自分の気持が先行して神の思いを拒絶する」そのような意味が入っていると言えるのです。なぜここでこんな言葉をあえて著者が引用したのかというと、およそ二つの理由があると思います。

一つは、今、彼がこの手紙を書き送っているヘブライ人の信徒、彼らが迫害や同胞からの抑圧の中では、自分たちの人生を伸びやかに楽しみたい、そのためにもう一度ユダヤ教に立ち返ろうか、というような後ろ向きの考えを持っている人々が少なくなかった。或いは、こんな苦しい思いまでしてキリスト教信仰を持つのだったら、もう耐え難い。だから、信仰を捨てようか、という考えを持っている人もいたということです。

こういう状況が正に「荒野における四十年においてイスラエル人の行きつ戻りつした時の思いと同じ」なのです。そして更に「あなたがたは、あの荒野の四十年間の姿を追体験しているのだ、しかし、よく考えて見なさい。辛い四十年間の歩みの中で、本当に救われるにはどうしたらよかったのか。残念ながら。神に対して不従順であった者は誰一人カナン

の地に入れなかったではないか。神の約束を得ることは、神の御言を信じ、従い続けることに依るのであって、それ以外のものは全く意味を持たないのだ」と、どうしても訴えたかったのです。それで、そのことが詩篇95編の引証の中に非常に強く出て来るのです。
(12節 主はモーセとアロンに向かって言われた。あなたたちはわたしは信じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なることを示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない。13節 これがメリバ(争い)の水であって、イスラエルの人々が主と争ったところで、主が御自分の聖なることを示された所である。)

第9節から11節

荒れ野であなたたちの先祖はわたしを試み、^{ため}験し、四十年の間わたしの業を見た。

だから、わたしは、その時代の者たちに対して憤ってこう言った。「『彼らはいつも心が迷っており、わたしの道を認めなかった。』そのため、わたしは怒って誓った。『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』と。」

ここで著者は、大変厳しい詩編の言葉を持って来ます。しかし、この神の怒りの御言の裏には、40年間に渉る神様のお導き、お働きかけ、そして、お心を砕いてくださった日々の積み重ねが神様におありになったことを、私たちは深く思い致さねばなりません。

＜怒られる神＞

私たちの義なる神様は「すべての罪を黙認し、無条件で赦してくださる神」ではあられない故に、究極的な選択として、御子を地に送られて十字架に磔られたのです。それ故に、その御愛の御業を信じ、その信仰を公言した私たちクリスチャンには「もし、神の国に行けなかったとしたら」という仮定はありえません。仮にあったとすれば、それは、父御子

の神様の救いの御業への侮辱であり、赦されざる冒瀆となります。

つまり著者は「私たちの神は、赦す神であられると同時に、怒られる神でもあられる」と伝えたいのです。何でもかでも、みんな受け入れますよ、と言われる神ではないのです。もう少し別な言い方をすれば、御自分との間の筋（人には越えられぬ神の聖域への^{わきま}弁え）を通される神、その神様は、聖霊によってその筋をきちんと質された者であれば、喜んで永遠の安息地を与えてくださいます。しかし、その筋を質さなかった者は、人間的にはどんなに高潔な者であっても、御自分の御国に招き入れはなさない、「それが裁きなのだ」という考え方を、この著者は示そうとしているのです。

（この「神と人間との間の筋」を質さなかったのが、飲み水を神の力によって出して頂き、その栄誉を民の前で己に帰したモーセでした。）

更に、著者は「神がエジプトの国から導き出してカナンの地を継承せしめようとしたイスラエルは、その子どもたちの時代になって、カナンの地に入れるようになったのだ。けれども、あのエジプトを出た人々の中でカナンの地に入ることができたのは、たった二人だけだった。それ以外の者は、皆、神に対する筋を質さず、弁えがなかったので、カナンの地に入ることとはできなかった。それは、あなたがたもよく知っているだろう。」と言うのです。勿論、その二人というのはカレブとヨシュアという二人の若者だったのですけれども、それ以外の人々は皆、あの川を渡る前に死に絶えてしまった。そして、その子孫が入って行く、神に対する弁えを持った人々が入って行く、神によって新しく質された人々が入っていくのです。そういう形でイスラエルの信仰は継承されていったのです。

第12節

兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、生ける神から離れてしまう者がないように注意しなさい。

もしあなたがたの中に、神への信仰を捨て、神の御心に逆らう悪を企てる人間が出たら、その集団は皆滅びる。だから、そうならないように互いに注意しなさい。互いに見張り合いなさい、戒め合いなさいと呼びかけているのです。

第13節

あなた方のうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい。

ここで最初に12節で「注意しなさい」という戒めが与えられて、それを踏まえた上で、言葉を続け、13節で「励まし合いなさい」という次の段階の言葉が出て来るのです、『今日』という特別な刻限を持つ「神の時」の意味を熟慮しつつ・・・。

第14節、

私たちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、キリストに連なる者となるのです。

これは挿入句ですが「私たちがキリストに連なる者とならせて頂くには、初めてイエスをキリストと信じた時の信仰を、最後まで熟成させる道を生きていくことによるのです。」
と言っているのです。つまり、「イエスがキリストである（この御方は「人の子」として世に降られた、十字架の贖い主なる「神の御子」であられる）ことを百パーセント信じ、この御方以外に私を救ってくださる方はいないと信じ告白した時の信仰を、徹底的に守っていくために精進することです」と語り続ける。これはある意味では、自分の信仰を堅持することですが、更にその信仰を継承しなければならない使命感にも深く関わっていく大切な言葉だと思うわけです。

第15節

それについては、次のように言われています。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、心をかたくなにはならない。」

著者は、あなたがたがキリスト・イエスにしっかりとつながっていくために大事なことが以下の詩編95編の冒頭にある言葉なのです、と語っています。

詩篇95編1節～7節「主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。御前に進み、感謝をささげ、楽の音に合わせて喜びの叫びをあげよう。主は大いなる神、すべての神を超えて大いなる王。深い地の底も御手の内にあり、山々の頂も主のもの。海も主のもの、それを作られたのは主。陸もまた御手によって形づくられた。私たちが造られた方、主の前にひざまずこう。ともにひれ伏し、伏し拝もう。主は私たちの神、私たちは主の民、主に養われる群れ、御手の内にある羊。」

第16節から19節まで

いったいだれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか。モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか。

いったいだれに対して、神は四十年間憤られたのか。罪を犯して、死骸を荒れ野にさらした者に対してではなかったか。

神はいったい誰に対して、御自分の安息に与らせはしないと誓われたのか。単に従わなかった者に対してではない。彼らが安息に与ることができなかったのは、自分の意に逆らう神の御心に対して不信を抱き、**不信仰に陥ったせい**であったことを、胸に刻まなければならない。

「いったい誰が、かつては神の御声に聞き従ったのに、神に反抗する者となり果てたのか。モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか」これはすごい言葉です。「誰が反抗したのか?」「誰に対して反抗したのか?」そして「一体誰に対して、神はそうおっしゃったのか?」というように、次から次へと質問を畳みかけながら、この詩篇についての解説をしています。

16節では、「誰が、神の声を聞いたのに、反抗したのか?」

17節では、「誰に対して、神は四十年もの間、憤られたのか?」

その先18節では、「誰に対して、御自分の安息に与らせはしないと、誓われたのか？」

著者は、そのように問いかけながらも「神と私たちとの関係は生きた関係なのだ。神に背くようなことが一度起きたとしても、それ故直ちに神との関係を片付けられてしまう（壊されてしまう）という無機質な関係ではないのだ。」ということを強く訴えています。

「神の御声を聴くならば」というこの部分、“神の御声を聴く”、とはどういうことなのでしょう。それには、私たちにとって（この時代の人たちもそうだったのですが）神の御声を聴く方法が二つあったのです。

<日々御言を聴き続ける>

一つ目は、「人間の声が満ち溢れているこの世の中で、一人一人が『個人への神の御言』に耳を傾ける、そして、その御声の意味を聴き取る。」そのことがすごく大切なのです。しかもそれは、例えば、ある集会に出て一所懸命、神の御言を聴いたというような一時的な事柄ではなく、毎日毎日その神の御言から、御声を聴き取ることが大事なのです。

ここで荒野のたとえを用いてヘブライの人々に向かって呼びかけている著者は、恐らく、あの荒野において起こった出来事、出エジプトのあの出来事をもう一度思い起こさせている、と言ってよいと思います。

マナは日毎に新しく与えられた。しかし昨日のマナは今日の命にはならなかった。毎日マナを新しく神から受け、それを自分たちのものとして受けとめることでしか、自分の命を引き延ばしてゆくこと、或いは、永らえさせて行く道はなかった。ですから、あなたがたも毎日新しく神の御言を自分の心の中に受け入れなさい、神の御声として聴き取りなさいと呼びかけているのです。（「マナは日毎に新しく与えられた」の意味は深いです。）

使徒言行録の中では「ペレヤの人々は毎日聖書を調べていた」（使徒言行録17：11）と書いてありますし、あるいはイエスが弟子たちにお教えになった主の祈りの中でも、

「私たちの日毎の糧を今日も与えてください」（マタイによる福音書6：11）と教えておられます。ここで言う糧とは。ただ単に肉体の糧だけではなく、心の糧、信仰の糧をも含めて、日毎の糧を毎日お与えくださいと祈りなさい、というお勧めです。

<主の日毎の礼拝で聴く>

もう一つは「神の御声を聴く場所としては『公の集会』あるいは『主の日毎の礼拝』で神の御言を心して聴く、一所懸命聴く」そのことがすごく大切なことなのです。

ネヘミヤの記録の中に、「神の律法の中に書いてあることを読んで説明したので、多くの民はその読まれたことを理解した」というように書かれています。（ネヘミヤ記8：8）

きちんと神の御言が読まれて、それについての説明がなされたので、皆は神が何をお考えになっているのかが分かった。このことが「ネヘミヤによる宗教改革」の大きな原動力になったのです。

神の御言に依らないで神の宮が新たになるとか、神の群れが新しくされるとか、そういうことは絶対に生じない。神の御言によりすべてのことが進められて行く。ですから、きちんと公の場で神の御言を聴いてゆくことは、非常に大事なことになるのです。

例えば「ヨハネの黙示録」、聖書の最後の部分ですけれども、ここに「この預言の言葉を朗読する人と、これを聴いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである」(ヨハネ黙示録1：3)と書かれています。きちんと神の御言を読み、その読まれた事柄を一生懸命守って生きてゆこうとする人々は幸いである。神の御言を聴くことは、ただ単に聞き流すことではなく、それを守って行なうことだ、そうすれば、その人々は…というように書かれています。

私たちはそういう部分をしっかり考えていかなければならないと思うわけです。

神の声を聴きながら、それを聞き流し無視している姿を、この著者は「**教えに背く行為、神の愛を拒絶する行為**」というように考えているのです。

18節のところでは、従おうとしなかった人々（神との間の筋を弁えなかった人々）が信者の中にいたために、そういう群れの人々は皆滅びてしまったのです。だから、あなたがたもそのような群れにならないようにしなさい、あなたがたの従順によって神が与えてくださる御恵みを、自分たち皆のものとして感謝をもって受けとめなさいと勧めるのです。そしてそのためには「弱い私たちは自分たち一人一人では無理だから、お互いに神の御言の前に新たにされて励まし合い、助け合い、支え合って神の御言を生きてゆこうではありませんか」と勧めているのです。

この「**励まし合ってゆく**」という勧めの言葉を裏返して言えば、著者には「個人的な救い」よりも「教会としての救い、神の群れとしての救い」ということに、より大きな比重が置かれているように思います。

だから礼拝を献げ、交わりを持ち、互いに助け合うために祈り合い、仕え合っていこうではありませんか。「それこそが神の御前における共同体なのです」という呼びかけをここのでなしているのです。私たちはそういう意味で、非常に大きなスケールの中でこの手紙がヘブライ人に向かって書かれたことを、心のうちに留めておきたいのです。

<安息について>

4章に入って、更に現在的な適用が出て来るわけで、今日の部分は、「旧約の中に起こった出来事が、今も尚、私たちにとって有効であり、大切な問題なのだという事を非常に具体的な形で述べている」と言ってよいだろうと思います。

3：14の「最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、キリストに連なる者となるのです。」という挿入句のもっている意味は非常に大きいわけです。「神に最初に出会ったあなたがたが、あるいはイエスをキリストと信じるのがゆるされたあなたがたが、キリストによる裁きの日まで、その信仰を曇らせることなく明確に持ち続けることができたならば、神が与えてくださる『安息』に入ることができます。」

この「**最初の確信**」とは、イエス様の十字架の贖いと三日目の御復活とを信じ、かつ自分の罪が主によって贖われ、自分も死後に復活に与れることを確信すると共に、御子イエス・キリストの御愛と憐れみに感謝して、その御方を心から拝し、ほめ讃え、お仕えしてゆくことを決意することです。

『**安息**』という言葉が、特定の場所を示すとするならば、「神の約束の地カナン」を指していたと考えられるわけですが、究極的には、神が召してくださる「**神の国**」への招きです。ヨハネによる福音書の中にあるように「私の国」と神が呼んでいらっしゃる国、そこに入れて頂くことができるのは「私たちが神の御声を聞き、それに従って生き続ける時です。疑いなく今を生きること、今を神の御言の中で生かされている喜びとして生き続けること、証しし続けること、そのことによって初めて神の国にあなたがたが入ることが赦されているのです。」とここでは述べています。

パウロが目指した「**信仰義認**」へと至るアプローチは、ヘブライ人への手紙のアプローチと多少趣きを異にしています。しかしながら、パウロが至った「**信仰義認**」と、この著者の言わんとする中身とは、同じなのです。

両者の「**神を信じて生きる**」こととは、敵対するものが現れても、神が味方ならば恐れることなく神の御言に生きようではないか、もし、神の御心が私たちの命を奪われる道であるならば、喜んで命を捧げようではないか、と言っているわけですから、正に神の御言に聞き従うという点においては、同じなのです。

（「神を信じて生きる」ことの凄さを、これ程に表現しておられる方はないでしょう、只事ではありません。松山先生の生涯は、この信念・信仰によって貫かれていました。）

ただパウロは、ユダヤ人だけでなく、異邦人に向かっても語っていますから、表現として多少違ったニュアンスをもって語っていくわけです。それに対し、ここではユダヤ人、律法を持った人間に向かっても語っているわけですから、表現の仕方が異なっているのです。

「終わりの日に向かって神を信じ続けて生きた者こそ、神の国に入る安息が与えられるのだ、神は既にそれを約束してくださっているのだから、耐え忍んで生きてゆこうではないか」という呼びかけは、正に異邦人に向かっても、ユダヤ人に向かっても、神から等しく呼びかけられた呼びかけなのだと受けとめることが大切ではないかと思います。

内容的にはだいぶ沢山のことが述べられているところなので、4章に入ってから、もう少し一緒に学ぶ機会があると思いますから、今日は外郭の事柄、構造上の事柄を中心にしてお話してみました。

勿論何度か申しましたように、ヘブライ人への手紙の大事なポイントは「**聴く**」ということ、そこに非常にウエイトが置かれています。中でも「**神の御言に聴く**」ということは大切です。そこにおいて「聴く」という言葉を使う時は、「聴いて従う、聴いて生きる」というところにまで結びつけた意味での「聴く」なのです。「決して聞き流すことではない

のだ」ということをもう一度確認をしながら、第4章の学びに繋げていきたいと思ひます。何かご質問がございましたら、お聞かせいただけたら幸いです。1996年7月13日

説教

「見える目で観、聞こえる耳で聴く」

マタイによる福音書13章：10～17

森 容子

今回のテキストの直前には、有名な「種まきのたとえ」があります。畑に種を蒔く際に、道端にこぼれて鳥についばまれる種や、風に乗って石地や茨の中に落ちてろくろく育たない種などに比べ、良い地に落ちた種は、百倍、六十倍、三十倍もの収穫が得られるという、キリスト教の伝道や福音宣教におけるたとえです。

そして、そのたとえの解き明しというのが、今回のテキストの直後にありまして、そうした「種まきのたとえ」と「そのたとえの解き明し」との記事に挟まれた、まるでサンドイッチの中身のような今回の「主がたとえで語られることの意味」が記載されています。

つまり主は、群衆に「たとえ話」を語られた後、一足飛びに「その解き明し」に進まねず、ワンステップ置いて、彼らにも、その「たとえ話」の意味を思い巡らす猶予をお与えになったのでしょう。とは申しまして、今回のテキストは単なる橋渡しのお役目だけではなく、サンドイッチの中身と言うに相応しい、それ自体で滋養豊かな濃い内容を持っております。

10 弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。

「あの人たち」とは、舟に乗り込まれ座って語りかけておられるイエス様のお話を、是非ともお聞きしたいと、ガリラヤ湖畔の草むらに寄り集まって聞いていた群衆のことです。

しかし弟子たちは、自分たちでさえ十分咀嚼できないような深遠な主の教え、世の中の常識や価値基準とはかけ離れた、新しい主の教えを、「なぜ、たとえ話などで語られるか、その真意が分らない。」と思っていたことでしょう。もしかすると、そんな主をお諫めして、もう、たとえ話は止めて頂こう、というような、出過ぎた思いがあったのかもしれませんが。（こういうときに、お諫めの口火を切るのは、大抵ペトロのお役目でありました。）

そんな彼らの気持ちは、「イエスに近寄って」という言葉に示されています。舟中の彼らは、語っておられる最中のイエス様に近づいて耳打ちし、「主よ、たとえ話でなく、もっと具体的で、分かりやすいお話の方がよろしいのでは。たとえでは彼らに理解できません。」などとアドヴァイスを試みたのでしょうか、主はそんなことはとっくに計算済みで・・・

11-13 イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。

ということは、イエス様は、主の周りに集まってきた群衆が安易に「**天の国の秘密**」に触れることのないよう、あえて神秘のベールで覆うために、木は森に隠せとばかり、ありふれた「たとえ話」でこの秘密を語り、それを守られたということなのでしょう。

このことが、「**持っていない人は持っているものまでも取り上げられる**」ということ
で、主が語られた「たとえ」を悟ることの出来ない大かたの人たちは、主の御言をお聞きしたかった熱意まで取り上げられ、それ以上主に近づけさせない、ということになりました。また、それは同時に「たとえ」を悟ることの出来た人たちを、篩分けられるためでもありました。「**持っている人は更に与えられて豊かになる**」
ことは、「たとえ」を理解したごく少数の人たちを、主は弟子として受け入れられたということでありましょう。

つまり、種まき、畑、道端、鳥、石地、強い日差し、茨など、パレスチナではごくありふれた材料を用いて、たとえ話を組み立てられることにより、話の流れはスムーズで、別段どこにも立ち止まったり、ひっかかったりする部分がないため、主のお話は、大多数の群衆の右の耳から左へすり抜けてゆき、主の思惑通り、選ばれていない彼らは「意味内容を悟ることなく、たとえ話は忘れ去られていった」と思われます。聖書では「豚に真珠」、日本では「猫に小判」とように、それが不釣り合いの者には、与えられないのです。

その一方で主は、群衆の体や心の痛み、苦しみに対する憐みと慈しみに満ちておられ、人を誰彼と分け隔てられず、癒しの御業や、悪霊祓いの御業を惜しみなく行使なさいます。豊かなる愛餐のお食事会にもご招待されます。しかしながら、こと「**天の国の秘密**」を悟らせることにおいては、見えぬ人には見えない頑強な壁を設えられていて、そこに入り込むには、主のお選びとお許しが必要である、と言うことです。それは、今日のキリスト教会という、一種の聖域におきましても、言えることであるのかもしれない。

そして、たとえ話の悟りが与えられた人には「**更に与えられて豊かになる。**」という「**天の国の秘密**」が開示されます。それは、「ラビ（先生）と呼ばれているイエス様は実は、天の神の独り子であられ、地上で唯一人の贖い主であられる。そしてイエス様は、天の御国における復活の体と永遠の命の与え主であられる」という貴い福音であります。ですから、その主に選ばれし者、主に許可を与えられた者にのみ、主から直接、その「**天の国の秘密**」が福音の種として渡されるのです。これが主の弟子とされたお証しでありましょう。

この福音の種には、聖霊のお働きが確約されており、それなくしては、この福音が芽を出し、葉を開き、花を咲かせ、実を結ぶことはありません。そして、この種は、人間の修行や学問などで会得したり、解明したりすることのできぬ、神様御自身の所有物、霊的な神秘の種であられるのです。

そして、「**持っていない人は、持っているものまで取り上げられる。**」とは、この「天

国の秘密」に与りえない人々、つまり「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない」人々、御子イエス・キリストだけが与え得る、御国での復活の体、永遠の命を信じることも、祈り願うことさえできない人々は、人生において彼らが握っているはずの「この世の愛、この世の喜び、この世の平安、この世の健康、この世の希望」さえも、いつしか砂粒のごとくその手から零れ落ち、跡形も無くなってしまう、ということが述べられています。そのことは、以下の旧約聖書のイザヤ書6：9－10に記される預言の成就であります。

14－15 イザヤの預言は、彼らによって実現した。『あなたがたは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない。』

預言者イザヤが神の御言を上記のように取り次いだ際、唇の汚れた民は、神を畏れるどころか、大胆に反発し神を冒瀆したのです。そうした民を、罪から罪へ、不信から不信へと追い詰め、にっちもさっちも行かないところまで彼らを煮詰めること、それが預言者イザヤに課せられた使命であり、イエス様がたとえを用いられる理由でもあられたのです。そして終末において、主がそんな彼らに、たとえ話の真の意味を解き明かされる際には彼らの「はらわた」は、極めてにがくなり、激痛で苦しくなることでしょう。受け入れられない、消化できない、大きな異物を、無理矢理、力づくで飲み込まされたときのように。

16－17 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているのを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

「しかし」と、主は、弟子たちの方（この話の真の聴衆者）を振り向かれて、「真っ直ぐに、主なるわたしの姿を見、真っ直ぐに、主なるわたしの声を聞いているあなた方は、本当に幸いである。」と、清々しくも荘厳なる御声で、告げ知らされます。それは、旧約時代の多くの預言者たちや、義人と称されてき人たちが待望し続けてきたことであり、見たかったが、見るのが適わず、聞きたかったが、聞くことが適わなかった、メシアの御姿、メシアの御声であられました。

しかし今や、イエス様を眼前にした弟子たちは、その御姿、まさしく神の御子の御姿を拝見し、その御声、まさしく神の御子の御声を拝聴する者として、立たしめられています。が、本人たちには、それがどれほどのことであるのか、よく理解できていなかったかもしれません。そして、主イエス様に対するそうした「半信半疑」は、主の僕、クリスチャンと自称している主の教会の民にとっても、同じようなことが言えるのかもしれません。

イエス様のこうした多くのたとえ話は、福音伝道が広がりを見せ始め、主に群がる人々

の中に様々な反応が出てきた時期に、一種の篩として大切な役目を果たしました。湖の岸辺に大勢の群衆が詰めかけて、一見大成功のように見えたこの日の福音伝道も、本物の求道者はごくわずか。大多数は、別種の個人的な動機、もしくは利己的な思惑によって集まってきた人々でありました。

主はたとえば話を語られた際のそれぞれの反応によって、彼らの信仰の真偽をはっきりと見極めておられたのです。

さて、ある時、講演をされた絵本作家の末盛千枝子先生のお話に甚く共鳴した私は、著書『ことばのともしば』を購入しました。その中に、先生ご一家のクリスマスの洗礼の思い出を語られた素敵なお話がありました。それを私がやや要約しましたストーリーをここに記しますので、皆様、そこに何が語られているのか、味わわれつつ、お読みください。

私がまだ小学生の頃。終戦後も私たち一家は疎開したまま、父の郷里の盛岡に住んでいて、そのカトリック教会に行くようになったのです。そのきっかけは、両親にとって最初の男の子であった弟が、生まれて八か月で急性肺炎にかかって亡くなり、熱心なカトリックの信者であった伯母の影響を受け、その子のために教会でのお葬式を願ったことでした。

そして、ある年のクリスマス、父も働いていた東京から帰って来て、両親と私たちは一家五人揃って、洗礼をお受けしたのです。その頃、クリスマスのミサは真夜中に捧げられており、古く美しい教会は、靴を脱いで入る畳敷きでありました。

父は自分のために、東京で真新しい革靴を買ってきました。洗礼に臨んでのせめでもの「おめかし」だったのだと思います。戦後の物のない時代に、父の新しい靴は私たちにとっても晴れがましく、とても嬉しい気持ちになりました。たぶん、その時の父の服装はみすぼらしく、ただ靴だけが光って、新しかったからでありましょう。

ところが、ミサが終わって外に出ようとした時、父のその靴がありません。いくら探してもないのです。父は教会の神父さまからゴム長靴をお借りして、暗い夜道を家路につきました。私は残念でなりません。でも私が今でも忘れられないのは、あの時父も母も、その盗まれた靴のことを一言も言わなかったことです。足元で雪が鳴り、星が満天に光り、キリストの誕生を祝うのに、まことにふさわしい、貧しくも美しいクリスマスの夜でした。

ある時、ひょっこり教会を訪ねてみえたクリスチャンの若い女性と、少しお話したのち、この本を出し、私が紅茶を入れる間、この箇所をお読み頂きました。このお話の感動を、心疲れた様子の彼女と分かち合いたかったのです。読み終えた彼女の感想は、私の思惑を外れ、「私も、研修会でお気に入りの上等な靴を履いて行ったら、帰りの下駄箱でその靴が無くなっていて、色は似ているけれど、くたびれた安物の靴が残されていたの。しかたなく、それを履いて帰ったのよ、サイズもちょっときつかったけれど。返す返すも残念、無念で、あんないい靴を履いていくんじゃなかったと、今でもすごく後悔している

わ。」と。

それをお聞きした私は、「これは、五人のご家族が揃って洗礼を受けられた、特別なクリスマスの夜のお話なのよ。」と静かに彼女に告げましたが、その方の脳裏には、盗られてしまったご自分の靴の記憶が蘇って、尚もそのくやしきで一杯というご様子でした。しばらくして私が「なぜ、ご両親は、帰り道、その革靴のことを一言も言われなかったのかしら？」と問いかけますと、「もう、愚痴を言ってもしょうがない、戻ってこないと諦めたんでしょ。」という、いともそっけないご返事……。これ以上は、私も口をつぐみ、本を閉じました。

これでは、この素敵なお話も、福音（グッド・ニュース）には、なりえませんね。

思うに、このお話のクリスマスのミサには、信者さんだけでなく、ご近所やノンクリスチャンの方々も大勢集っていらっしゃったかもしれません。その中には、とても貧しい方もおられたかもしれません。雪道を下駄か何かで長時間歩き通し、痺れるほど足が冷たくなっておられた方もあられたかもしれません。

五人家族全員の洗礼という、神様からのこれ以上はない最高のクリスマスプレゼントに与った末盛先生のお父様、お母様は、この至福の返礼に、どなたか困っておられる方に革靴のプレゼントをすることができたことを、主に感謝なさったかもしれません。もしくは、そのような方の手に渡っていて欲しいと願われて、主にお祈りされつつ、雪の夜道を、洗礼の感謝をしみじみと踏みしめて、家路につかれたのかもしれません。

多くの月日が経って、あのとき、お父様の靴が盗られてしまい、ああひどい、ああ残念と思われた子ども時代の末盛先生も、今や、ご両親の聖く気高い信仰を誇らしく感じられ、
そんなドラマを計られた主の深い御心を合わせて感謝されて、胸を熱くされ、それを伝えずにはいられないという思いで執筆されたのでありましょう。「キリストの誕生を祝うのに、まことにふさわしい、貧しくも美しいクリスマスの夜でした。」と。

以上の私の解釈を交えてであります。このお話には、他にも様々なストーリーが成り立つでしょう。、多くの人物が登場されますから。熱心な信者であられた伯母様、赤ちゃんで亡くなられた弟さん、素晴らしい信仰者のお父様、お母様、小学生の末盛先生と二人のご兄弟、教会の方々、図らずもお父様の靴を履いて帰ってしまった人、恐らくご自分の長靴を貸してくださった神父さま……。お話の主人公となる人物を据え変えることにより、そのストーリーや解釈は七色にも変化致します。

けれども、外してはならないのは、このお話の中心に、真の主人公としてのイエス様、その日洗礼を授けられたイエス・キリストという神様がおられることです。この御方の存在と御心を外しては、どんな素敵なお話も、どんなに忘れ難い思い出も、時が経てば色あせ、本物の輝きはありません。それらはお証しにも、福音にもなりえません。その意味では、このお話は、先程の「**飾としてのたとえ話**」になりうるかもしれません。

常に心新しくキリスト教の教会暦を辿りながら、御国に至るまでの、ひとめぐり、ひとめぐりの螺旋状の道のりを歩み続ける私たち。その道程で体験させて頂く様々な出来事の

中にも、イエス・キリストという神様を主人公とする、本物の物語が、主御自身によって幾つも、幾つも紡ぎ出されてゆくのでしょうか。

私たちはそれを、聖霊のお助けにより、「見える目をもって観、聞こえる耳をもって聴きとって」、そこに、主のご臨在が明らかなることを知るに至ったならば、その出来事の感動の一部始終を、静かに誤り無く語り終え、同席者と共にもう一度深く主を味わい、この世のものでない普遍的な喜びをもって、主とその御心に額づきたいと存じます。

またある時は、もっと高らかに、もっと、もっと美しくふさわしい言葉で、この世の人々に、かくも素晴らしき主イエス・キリストという神様をお伝えしたいと願うのです。それが、いつの日か、どなたかの心の灯となり、慰め、励まし、立ち上がる力となられ、更には、溢れる希望を抱かれて、あかあかと、今度は人を照らされる信仰へと結実なさいますようにと、天を仰いで、そんなビジョンを祈りつつ・・・。

慕いまつる、主なるキリスト・イエス様に、黙祷をお捧げ致しましょう。

写者あとがき 1 (再掲2022年2月1日)

まだ始まったばかりですが、大変なことを始めてしまったと畏れを感じています。

正に自分の信仰が問われています。松山幸生先生のお声を聞きながら写書し、激しく魂が揺さぶられ、森容子先生の校正とご指導をいただいて深い意味を学び、イエス・キリストの御愛、恵みを実感しております。

知らないことばかりで、単に写せばいいという単純な発想の不謹慎を反省しております。森容子先生からは、私の発想は聖霊のお導きであるとのお言葉を頂き、正にそれ以外の何ものでもないと驚き、謹んで進めさせて頂いております。

まだまだ初歩的なミスを繰り返しておりますが、森容子先生の温かい眼差しと寛容の中に包まれながら、一文字、一点、言葉の言い換え、そして、初めての人にでも分かるようにと短い挿入、カッコ付きの説明で、聖書の御言葉を縦に読み、横に読み、奥深くを味わうことができるようになってきています。聖書を学ぶには知恵と啓示の聖霊の導きが必要だと今更に実感しております。

松山幸生先生が巻頭で「ヘブライ人への手紙」は、旧約聖書と新約聖書の橋渡しになる役割を持っていると書かれておられましたように、当時の文化、風土、慣習と歴史を記した旧約聖書を理解しないと読み進めない難解なところがありますが、その難解部分が、現代にそのまま通じるところが多いことが分かりますと、興味、関心が増幅致します。

「旧新約聖書は神の靈感によってなり」で始まる信仰告白を学び直しております。

2022年2月1日

写者あとがき 2 (2025/02/16)

この聖書の箇所の小見出しは「神の安息」になっていますが、安息についての説明があるのではなく、安息にあずかる者になるには何をなして、何をしてはいけないのか、出エジプトの出来事を繰り返し引用して厳しい警告がなされています。

しかし、著者の一貫した願いは「キリストに連なる者になり、安息にあずかる者になりなさい」であり、祈りです。

「メリバやマサ」の出来事が繰り返されます、それも厳しい言葉です。「わたしの業をみながら、なお、わたしを離れ、試み、験した」「心の迷う民で、わたしを知ろうとしなかった。だから、わたしは怒り、彼らにわたしの憩いの地に入れなかった。」

この手紙の聞き手である第2世代のユダヤ人キリスト者に理解しやすいように旧約聖書の引証でもってこの手紙は進められています。

しかし、松山幸生先生は「今日という日のうちに」と私たちに語ってくださっています。まさに著者が旧約聖書を用いて勧告したように、「ヘブライ人への手紙」を用いて現代の私たちに訴えておられるのです。

安息にあずかる者となるために、今日という日の大切さを「良かれ悪しかれ、今日という日は神のみ前に覚えられている。私が確かに生きた生き様として神に覚えられている。それは未来に結びついていく日である。」この未来と言われているのは「終末」のことだと思います。今日という日を終末と結びつけておられる。

具体的に何をしてはならないか。『心を頑なにしてはならない』、それは

「神への反抗、神を試みること、心が迷うこと、罪に惑わされること等」であり、これらが、神から離れさせ、不信仰になっていくのだと言われています。

15節「今日、あなたが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、心をかたくなにしてはならない。」14節「私たちは、最初の確信を最後までしっかり持ち続けるなら、キリストに連なる者となるのです。」6節後半「もし、確信と希望に満ちた誇りをもち続けるならば、わたしこそ神の家です。」ローマ信徒への手紙5章2節「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」

その他にも松山幸生先生が詳しく説き（啓き）明かしてくださっているキーワードは

「今日」、「思い起こす」、「忘れてはならない」、「記憶し続けなさい」「日々聞き続けなさい」これらのために「主日礼拝がある」ことを諄々と解説されています。

「ヘブライ人への手紙」は旧約聖書が前提となっていますから、独学で読みこなすことは困難です。松山幸生先生のお導きで、旧約聖書も紐解きながら、更に森容子先生の解説で続けて参ります。有難うございます。 2025年2月16日 小原靖夫